
世界に愛された娘

春

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界に愛された娘

【Nコード】

N1382R

【作者名】

春

【あらすじ】

世界に愛された娘は、己の意思に反して世界を越えた

平凡で凡庸な娘の、異世界での生活は如何に？

世界を越え生きる凡庸な娘

何も変わらない日常

嫌気がさす、なんて事もなく今日も不変な日常を生きる

平凡な私は凡庸な日々で満足していたし、この先も、そう在り続けることに何の疑いも抱いてはいなかった。

ある日の夕暮れ時、何もないはずの道に文字通り呑み込まれるまでは。

不変な日常を享受し平凡であることを享受している娘を、異世いせいに送ることに躊躇う

曰く神と呼ばれる存在

溜め息を吐いた

平凡な娘は、当たり前毎日を過ごしていただけ

だがそれ故に好ましく思っていたというのに。

せめて、彼の世界では平穏であれと願う

暗き牢

水音がする

断続的な音に睡眠を邪魔され不快に思うも眠りの中、ふと我に帰る

何時^{いつ}寝た…？

思い出すのは夕暮れの空

何時もの専門と家を繋ぐ通学路

グニヤリと沈むアスファルト

呑み込まれる身体

凍りつき声にならぬ叫び

はっと目を開いた

<おお、起きたようじゃの>

・・・もう一度夢の世界に戻っていいだろうか・・・

<現実に戻ってこい。>

「・・・貴方、どなた？」

<儂か？儂はいわゆる、精霊じゃな。御主は・・・随分変わった魂の持ち主じゃの>

まじまじと見つめられ思わず仰け反る。こんな口調なのに、彼自身は金髪碧眼の美系なのだ。

「せいれい・・・」

<世界を超えたか。娘>

「・・・かもしれない、ですね」

<納得したのか？飲み込みが早いな>

「生憎、私に靈感なんて生まれて20年、なかったものですから。白昼夢を見てるなんて事もなさそうですし。・・・現状に嘆くのを先にするより、現状の把握に動く方が良さそうですし」

<賢き娘。儂に何か聞きたい事は？>

「この世界について、一般常識、この場所について」

<賢明じゃな。

この世界に名はない。遙か昔、虚無だったのを二人の神が創生した名もなき世界

天、或いは生をつかさどる神、リヒト

地、或いは死をつかさどる神、ナハト

天を創り地を創った二人の神は溢れる神力で更に他の神を生み出した

火を司る神、フランメ

水を司る神、クヴェル

雷を司る神、ブリッツ

緑を司る神、ブラット

風を司る神、ルフト

更にそれら神々によって生み出された精霊達

彼らの力は具現化し世界に大地と広大な海が生まれた

海からは複雑な身体構造の生物が生まれ

大地からは様々な種の緑が生まれた

やがて生物は大別して三種になる。

大きな体と翼を持つ天空の覇者、ドラゴン族

大地と大海の覇者、人・獣人族

闇の覇者、魔族

彼らは精霊や独自の魔法、魔術によって世界に生きる。ここまでは良いか？>

「大体」

<この世界は更に幾つかの国に分れている。ここは人主体の王国ケ
ーニヒ

その王宮地下牢だ>

「・・・地下牢？」

<そうだ。>

「私何か悪いことした？」

<さて、人族の考えなど分らぬ。

大方不法侵国じゃないか？>

「そりゃそうか」

<納得が早いな。そなたの思考の回転力は称賛に値する>

「それは・・・アリガトウ？」

<やはり面白い娘じゃ

娘、儂と契約せよ>

「へ？」

<右も左もわからぬ世界じゃ。儂がいたほうがお得ぞ？>

「それはまあ・・・契約って？」

<我等精霊を使役するために交わす約束事。やり方は簡単じゃ。精^シ霊の体に触れ、名を呼べばいい。ついでに御主の名前も言うんじゃ。精霊が納得してなければ名は分らぬ。>

「・・・・・・貴方も物好きよね

よろしく。私の名前は^{カンスキ}門^{カナエ}香苗

えっと、・・・・・・サタン？」

<儂は闇の精霊

よろしくな。世界に愛された娘>

掻き消えた精霊、サタンに目を見開く

しかし間もなく更に大変な目に合うとは思わなかった

「サタンって悪魔の名前じゃん・・・」

精霊との契約、惑い（前書き）

悪魔・天使の名前に意図はありません。宗教的意味はないのでご了承ください

精霊との契約、惑い

<うふふふふ

かーわーいーいーV>

<綺麗な魂の色だね>

<居心地良い魔力だな>

<………そのように固まらなくても……>

即答しましょう！無理ですと！！

サタンが掻き消えた次の瞬間、四人の美男美女が現れた。サタンと似た雰囲気、精霊かと判断したのは間違っていないようだが、この四人、会って早々契約を申し出たのだ

話がうまくいきすぎているだろ。と突っ込むのは当たり前。

つい先ほど目覚め、都合良くサタンがいて、説明をしてもらい、拳
句契約まで交わした。

この契約がどのように作用するかはまだ分からないが、それでも続
けざまにこうも都合が良いと可笑しいと思うのが一般的思考だろう

「何故、私に？」

くうふV簡単よお。

貴女、凄く大きな魔力を身に秘めているし、魂は清浄だし、なによ
り周囲を取り巻く神気が優しいもの>

「色々、突っ込みどころ満載なんだけど？」

<魔力の事？魂の事？神気の事？>

「……全部よ。生憎、世間知らずなの」

<世間知らずでも可笑しくないだろうね。君、世界を超えたんデシ
ョ？>

「精霊だとわかるの・・・？」

<わかるよー！！！>

<世界を超えたから、きっと魂が清浄なのだろうな。本質的なものも、勿論あるだろうが>

<さしずめ神気が優しいのは元々君が住んでいた世界の神様からのせめてもの気持ちじゃない？>

「??.?」

はっきり言ってチンプンカンプンだ

<魂はニュアンスでわかってくれ。言葉で説明するのは難しい。勘で判断しているようなものだし。>

<神気ってのはね、この世界に生きるものなら誰でも纏っているわ。通常は、纏ってるだけなのよ。禁忌を犯したりすると神気は乱れて刺々しくなるし、反対に神々に愛される素質があれば優しくなるの。

正直あんまりいないけどねー＞

＜我々精霊が使役を許す者達への条件が、先にあげた三種だ。

魔力が多くなければ下級な精霊の力を使役しても倒れてしまう。我々は魔力をもらって力を貸す、give&takeの関係だからな。

魂が穢れている物にはそも精霊は近寄れぬ。これに該当するのは主に魔族だな。まあ一般人の魂の色は大体黄土色だ。対してそなたの魂の色は穢れなき白だ

神気が刺々しくても我等は不利益が多い。我等は元は神から生まれた力だ。主体の神が嫌っている物を我等が好きになれようはずもない。＞

「・・・そうなの。」

＜あんまりわかってない顔＞

くすくす笑う精霊にまあ・・・と頷く。

初耳な事が当たり前だが多すぎて処理に時間がかかるのだ。

<私達が現れた理由がわかった？じゃあ契約しましょう>

「・・・はぁ・・・」

私は問　香苗よ

・・・セラフィム、バエル、フェニックス、ファヌエル」

名を呼ぶとそれぞれ微笑み掻き消えた

「・・・なんで悪魔と天使の名前なの・・・精霊ってこういうもの？」

香苗は知らない

本来精霊と契約するには膨大な知識を持ち、魔力を使って召喚式を行い、贄を捧げなくてはならない事を・・・必要不必要関係なくこの世界の常識である

香苗と契約を交わした5人は5人とも精霊の中ではかなりの上級である事を

セラフイム・・・癒しを司る。ボンツキュツボンツのグラマラスなおねーさん

バエル・・・黒に近い藍の鎧を身にまとう騎士の姿。

フェニックス・・・不死鳥の姿。炎を自在に操る。人型は寡黙な紅い鎧の騎士。

ファヌエル・・・希望を司る。子供の姿。

サタン・・・爺口調の金髪碧眼の甘い顔立ち。

精霊との契約、 惑い（後書き）

作中の天使悪魔の名前は特に意味がありません。宗教的意味はないのでご了承ください。名前と姿を変更しました。おいおい文章も編集していくかもしれません

世界

まともな食事も水もなく夜がやってきた

「虜囚ってこの世界ではこんな対応なの？」

＜それはこの国が今色々ピンチだから特別なのよ＞

「ピンチ？」

＜この国はねえ長い事人種差別と国民至上主義を謳っててね、他国の者や人ではないものに殊更厳しかったワケ。とうとう隣国のそれも大国と言われる国の王太子を捕らえてしまった時から、世界中から切っ先が向けられたの。

だから今、この国に近寄る者は危険人物として捕らえられるってわけ＞

「・・・アホとしか言えないんだけど、その王太子をなんで捕らえたの」

＜王太子が国境付近にいて、丁度目にとまった事件に関わってしま

ったんじゃよV>

「・・・サタン、唐突に出現するのはやめて頂戴」

<すまん。面白そうな話をしていたのでな。ついふらふらと。>

「・・・・・・・・・・・・はぁ・・・で事件って？」

<この国の中で丁度獣人族が処刑に合う所だったのよ。罪状を聞いた瞬間、駆けだして乱入し、獣人族を逃がした。>

国王は怒り心頭で捕まえちゃったわけ。>

「嫌な予感するけど、罪状って？」

<税金を支払わなかった罪。この国ではこの国の民以外にはびっくりするぐらい課税されるんだよ！。10倍？だったかな。獣人族になると15倍。>

「・・・・・・・・・・・・それで乱入して捕まった王太子は？」

<隣にいるが？>

「・・・・・・・・・・はい？」

<ここは王宮の地下牢だと伝えたろう？王太子は隣の魔術の掛けられた牢で目隠しされ芋虫状態で転がっておるぞ>

「王太子が芋虫・・・」

頭抱えたくなった。

<カナエが助けたいなら助けようか？>

こてん・・・と首をかしげるセラフィムにぜひお願いします。と伝えたのは当たり前だろう

あっという間に隣の牢のあると思われる石壁に消えたセラフィム

「魔術って精霊の関する事ではないの？」

<力の弱い奴なら阻めるぞ？じゃがセラフィムぐらいの実力が有れ

ば問題ナイナイ>

<カナエ、魔封じの術がかけられてるみたいなの。私が送る分には送れるんだけど、彼が受け取れないみたい。

こっちの牢に転がしても良い？>

「普通に連れてきてください」

どうして精霊はこうも野蛮なんだ

<主、野蛮なのではない。我々精霊は主人以外に欠片の興味も抱かないのだ。>

フェニックスのセリフにそうですか・・・と疲れたように息を吐いた

・・・どうして言葉に出してないのに通じちゃうんだか

セラフィムが連れてきた曰く王太子は本当に芋虫状態だった

おまけに衰弱しているのか身じろぎする動作がひどくゆるい

「とりあえず出来る範囲で応急救護ね」

世界（後書き）

王道ですね・・・

目覚めの瞬間

王太子の衰弱具合は酷いもので、ある一定の治癒はセラフィムがしてくれたものの完治とはいえない

「何か食糧があればいいのだけれど」

<取ってこようか？>

「・・・お願いします」

精霊に人間の心の機微や思いを汲み取るのは無理なのか、それとも私と彼らの繋がりが浅いからなのか彼らは此方から言いださなければ動かない・・・言っても拒否されることのあるのが精霊の使役の常識らしいがそれは後々知ることになる・・・

<カナエ用にパンと、水、果物。王太子用にハイレン持ってきたよ>

「ハイレン？」

<治療に使われる果物。栄養価も高いぞ>

「どうやって使えばいいの？」

＜あら、簡単よ。絞って飲ませるの＞

「なるほど。」

＜一個まるっと使うとよいぞ？そ奴ほど衰弱してるなら量の規制は不要じゃ＞

＜主、ハイレンは固い。私がつぶして飲ませよう＞

「有難うフェニックス」

＜私は王太子の治癒能力を上げて回復を促しとくわ＞

「セラフィム有難う。」

＜じゃあ僕はこの王宮の者に感づかれぬよう細工をしとくからの。＞

「助かるわサタン」

＜礼には及ばぬ。カナエは王太子が回復しないと心向け続けるじゃろ？ 儂等は儂等の方を見てほしいからさっさと治すんじゃない＞

気が利くと思ったら、そういうことだったらしい。ちなみにファヌエルとバエルは情報収集に出ている

そうこうしている内に色々あったからか、あらがえず何時の間にか牢の壁に寄りかかり眠っていた

夢を見た

当たり前の生活を送っていた時の事

なんとなくで入学した学校は思っていたより楽しくて、将来はこの方向で進むのも悪くないと思っていた

あと数カ月で2年間の学び舎を卒業し、就職していくはずだった

友達だっていたし親兄弟だっていた。生憎恋人も好きな人もいなか

ったけどそれなりに日々満足して生きてきた

当たり前の生活が崩壊するのは、自分が思っていたよりショックだったようで、そんな夢を寂しく見ている客観的な自分がいた

―責めて良い―

―見守り続けていたからわかる。お前は飛ばされるべきではなかった―

―アレ（・・・）だけ飛ばせばよかったのに、お前を巻き込まざるを得なかった―

―すまない・・・だが出来るなら、幸せになってくれ―

響いた声に不思議と驚きはなかった。夢だから、なのかもしれないし、最早驚き疲れたから動じなくなったのかもしれない。

―アレってのが激しく気になるけど、仕方ないよ来ちゃったものは。それに最悪でもない。

楽観主義が私の代名詞だから、ダイジョウブ。時が来たら嘆いたり、

するのかもしれないけど・・・今は前向きになるしかないもの。大丈夫よ。幸せになるわ。

幸せなんて高望みしなければその辺に転がってるもののなのよ――

――そういうそなただから、平穏であれと望んでいたのだよ。また（・
・）会おう――

目が覚めた時どなたかに見下ろされていた。

「どちら様でしたっけ？」

「・・・・・・・・お前が助けてくれたのだろうか？」

「ああ・・・・・・・・王太子サマ？」

寝てる女を見下ろすなんて結構な趣味ですね」

「今、起こそうと思っていたところだったのだ。他意はない」

どっこいせと起き上がる

＜じゃあ皇太子を元の牢に戻すぞー＞

「あれ戻すの？」

＜治療は終わったんだもの。妥当でしょー。はい水＞

「有難うセラフィム」

＜戻したら、そろそろこの牢から出ましょう。いい加減主にこの世界を見て頂きたいし、何より主を牢に入れ続けるなど言語道断＞

「無口はどこへ言ったの？フェニックス」

＜でも同感よお・・・湯浴みもしたいでしょ？カナエ＞

「それはしたい」

「一寸待ってくれ」

「？」

「先ほどから、君が連呼してる名前が精霊の名前なのか？」

「・・・見えてないんですか？」

「生憎私は生まれた時から魔力の量が少なくて魔術師の訓練は受けなかった。」

「しかしもしその精霊の名前が本当なら、君はとんでもないな」

「・・・言葉交わして数分の人間にとんでも扱いされたの初めてだわ」

「気に障ったなら謝罪する。」

しかし、光の精霊の3大精霊の名前と闇の精霊72柱の中でも力の強い精霊の名が出たら、誰もが驚く」

王太子の言葉に何よりも思ったのは、闇の精霊72柱についてだ。まさしく地球にあるソロモン72柱のようではないか。・・・地球とは似かよった所が有るのかも知れない

三大精霊というのはとりあえず聞かなかった事にしておく

「そのような精霊を使役する貴女に御願が有る。

どうか私も連れ出して頂けないだろうか」

まあ妥当な願いだ。王太子残して脱出するののもどうかと思うしとサタンを見る

＜面白くはないがこ奴を残してカナエが後々責められることになったら嫌じゃな。＞

＜仕方ないわね。途中で捨てましょう＞

「それでも十分私恨まれるから。普通に送りましょう」

<主が望むなら>

<まあ俺らカナエ様の僕だし。異存はないよー>

<ご主人様が望まれるのでしたら。>

目覚めの瞬間（後書き）

予想通りの展開ですよね・・・

世界

初めて上から眺めた世界は、まるで中世のヨーロッパ。

ちなみに何故上からかと言うと勿論精霊達が関係する。詳しく言えばフェニックスが人から火の鳥に変化し背に乗せて飛んでいるからだ

王宮の脱走？物凄くあっさりサタンとバエルが突破してくれましたとも。それはもう二人とも笑顔で。

いや、恐ろしいねえ。途中から人が勝手に避けて行きましたよ

「カナエ・・・」

「どうしたんですか？王太子様。って、なんか物凄く青白いですけど・・・」

「カナエ、私に才が無いのが悪いのだが・・・私には精霊は見えないと言ったな・・・察してくれないか」

王太子のセリフにああ！と思わず声を上げ納得した。

つまり王太子にはフェニックスの存在も視えないから、今現在文字通り空に浮かんでいるのだ。頼りになる物もなく。それは確かに恐ろしいかもしれない。

今地上何mか分らないが、ビル10階や20階の高さではない事は確かだ。だって高すぎて地面にいるはずの人の姿もよく分らないから。

「確かにフェニックスの姿も視えないでこの状況じゃ恐ろしいかも。」

無駄に早いからなおさら。でもぶっちゃけどうしようもないし

「ねえフェニックス。王太子様が分るように姿を顕現することは無理？」

「出来ます」

うん。分ってたよ。精霊ってのはこういうもんだって

次の瞬間王太子が詰めていた息を吐いた。

私には変わらないように見えるが王太子にはフェニックスの姿が見えるようになったんだろう

「有難うカナエ・・・」

それにしてもフェニックスというのは美しいのだな」

しみじみフェニックスの姿を眺める王太子の瞳には確かに喜びがあった。ひよつとしたら彼は魔力を持たない事で今まで色々あったのかもしれない。

「不死鳥の炎は浄化の炎」

「？なんだそれは」

「私のいた所ではそう言われてるんです。穢れてしまった魂を浄化の炎で清めるって。フェニックスを見てたら思い出しました」

「そうか・・・」

「そういえば王太子様、先ほど牢で仰った光の三大精霊と闇の精霊柱について教えて頂けませんか？」

「カナエは実際に契約しているのに知らないのか？」

「無知なもので」

「ふむ。」

私も書物で習ったくらいの知識だが・・・」

王太子曰くの話をもとめると、光の三大精霊も闇の精霊72柱も地球のものにそっくりだった

精霊にはその力によって階級が存在し、又大きく二つに分かれていて。

階級は、光の精霊は地球で言う上級天使と下級天使。闇の精霊は魔王と小物の魔族のようなもので、階級が高ければ高いほど契約は難しいのだとか。

やっぱり三大精霊というのは地球でいうところの上級天使セラフィムの熾天使ケルビム・スローンズ・座天使なのだとか。セラフィム契約しましたよ?! 結構あっさり!!

72柱も又同じで、地球と同じように強さは番号が若ければ若いほど強いらしい。つまり1番のバエルは勿論、72中37番のフェニックスもかなり強いらしい。

聞いた瞬間まだバエルの事バレてなくて良かったと息を吐いた。面倒事はごめんだ。特に手に負えないレベルの面倒は。私はあくまで

平凡に現代を生きていた20（ハタチ）なのだから

ちなみにサタン＝ルシファーなこの世界ではどうもサタンは闇の精霊の中で最も強い魔王らしい。これも勿論言っていないけど。

つくづくなんで私と契約したのか謎ですよ皆サマ

世界（後書き）

色々変更したのもう一度最初から読まれる事をお勧めします。一話からもう一度チヨコチヨコ編集したいとは思いますが

指針

王太子を乗せたフェニックスは一路彼の国を目指していたらしい。

遠くに街並みが見えると、人目に付かぬよう細心の注意を払って森の中に降りてもらう。

「高所恐怖症でなくて良かった。」

「（途中までの高さは高所恐怖症でなくても十分恐ろしかったが）」

〈私も主が高所恐怖症でなくて良かった。〉

〈危うく一番得意な分野で活躍出来なくなるものね〉

〈うむ〉

大真面目に会話するセラフィムとフェニックスに笑う

「じゃあ王太子様、ここからなら帰れます？」

「うむ。その事だが、何か私に出来ることはないだろうか？助けて

貰ったのに、その恩も返せないとあっては、
王太子の名折れだ」

と言われても。

へせっかくの機会だし、王太子の国の入国許可貰ったらどう？

ナイスだセラフィム。それが良い！

「私に入国許可下ろせますか？出来れば王太子様の許可というのを
表に出さないで」

「勿論可能だ。…そんな事で良いのか？」

「十分です。」

「そうか。ならば歩いて街まで行こう。

精霊で行けば楽だが目を付けられる。

可能ならば役所まで民に私の姿ごと見えぬように出来れば良いのだ
が」

へへ不可視の術なら儂が施そう。全く。儂が最初に契約したのに、
儂の出番が少ないとは…

サタンが拗ねたように言うので笑えた。私が紹介していないサタン達三精霊の声は王太子には聞こえない。

「不可視の術を掛けてくれるみたいです。」

王太子様、精霊と契約している人間は珍しいのですか？」

「：そなたはフェニックスやセラフィム以外にも精霊が付いているようだな。」

まあ言及するつもりはない。そなたはあくまでも私の恩人だからな。

精霊と契約している人間は確かに多くはない。私の様に魔力の少ない者以外は大抵の精霊の姿を見ることが出来る。

隠していたのなら精霊に望めば気配の欠片も隠すだろう。」

王太子の言葉に彼等を見れば分かったと頷き隠れてくれた。

精霊が隠れてもサタンの力は発揮され続けるらしく、皆から私達は見えないらしい。

常識やぶりの力だ。全く。

空から見ればほど近かった街も地上からとなると少々遠い。森の中で一夜明かすことに不満はない。安全ではないが、石造りの地下牢より遥かにましだ。王太子に不満はないのだろうか。まあ不満があった所でいきなりふかふかのベッドが登場したりはしないのだが。

「野営には慣れている。自国内だというだけで安心できるよ。」

王太子は王太子でも戦も出る王太子らしい。後ろでふんぞり返っているようなオウジサマはごめんだからちよつと好感が持てる。

「そういえば、名を聞いていなかった」
今さらだ。

「私も名乗り忘れていた。なんだかんだ忙しい道中だったからな。」

私の名はアズライト。この国の王位継承者にあたる」

「カナエⅡカンヌキです。一般人です？」

私の回答に目を丸くした王太子は次の瞬間クスクス笑いだした。

「精霊と少なくとも二人以上契約を交わしていて、一般人はなからうて。」

カナエと言うのか。このあたりでは聞かぬ響きの名だな。」

「（本当は五人と契約してますよー）」

まあ御近所から来たわけではありませんからねえ」

「故郷へ帰る旅路にあの国に囚われたのか？」

「うーん。まあ不可抗力で。」

「そうか。」

カナエ、急ぐ旅路でないなら、我が国の学び舎で学んでみないか？
そなたと話していると思うが、存外この辺りの事を知らぬと見受ける。
学ぶ事が嫌いではないなら、為になると思うぞ」

「学校？」

「そうだ。我が国で最も大きく、過去偉大な先人を大勢排出している。」

学び舎の名はアイリス ラエビガータ。魔法から剣術まで分野別に生徒の育成に取り組む王立の学び舎だ」

考えてみると良い。と言われ話を切って寝ることになった。

香苗は心で会話する

「（面白そうじゃない？）」

<主に従うまでの事。>

<カナエの社会勉強になるし、私も興味あるわあ>

<ご主人様に僕らの事をもっと知っていただけるなら、嬉しい事です>

<人が成長するのを見るも一興。カナエの為にもなるしな>

<賛成V面白そうじゃないですか！カナエ様>

満場一致で決定のようである。

.....

アイリス ラエビガータ（杜若）花言葉は幸運。雄弁

誤算

「フレイム（超小声）」

ドカンッ

「なんで火柱になるのさ…」

項垂れる私。フェニックスが小鳥サイズで肩に乗りつつ宥めてくれる。

実に困った。

魔力コントロールが効かない…

〈魔力コントロールが効かないのは魔力が大きすぎるからだな〉

「私、細かい作業得意じゃないのに！」

何故、香苗が頭を抱えているか。それは彼女が順序よく、アイリス
Ⅱラエビガータ国立学舎に入学した事に由来する。

志望する将来の職により、学科を決める（この辺日本と変わらない）
精霊と契約した以上魔法学科が良いと思い選択したのだが、今更な
がら失敗したかもと後悔しているのだ。

本日プレ授業があった。教授が炎を生徒の前で出して見せたのだ

【炎よ全てを焼き尽くす炎よ契約者たる私の掌中に現れよ】と。

それを見て純粹に楽しそうだと思ってフェニックスに魔力を隠して貰いつつ、小鳥に変幻してもらいアイリスⅡラエビガータの中でも目につきにくい場所に移動して教授の真似をしたのだが：彼女が考えていたより遥かに彼女の有した魔力は強かったのだ

教授と同じ詠唱をすればクレーターが出来、詠唱の言葉を減らせばクレーターは出来ないまでも炎が渦を作った。

・
とうとう、冒頭まで減らしたのに、それでも駄目とかどうしたら・

＜改めて主の魔力の強さを実感いたしますね＞
しみじみと言うフェニックスを掌に乗せる

「・・・関係ないんだけど」

＜？＞

「何時もこの姿でもいいんじゃない？とっても可愛いし」

＜・・・主よ、かなり複雑なのだが＞

掌の小鳥は淡いオレンジの羽を羽ばたかせる

そうは言われても目はクリッとしてるし柔らかい羽は触って心地良い。

頬が緩むのを自覚していれば後ろからガバリと抱きつかれた

「・・・何してんの？」

＜カナエがフェニックスにばかり構うのが悪いだろう？＞

サタンが面白くなさそうに言う。見れば他の精霊も面白くなさそうで、人間ばい精霊だと思つづく思う

＜それにしても、こんな弊害があるのねえ＞

＜魔力が大きいって良い事ばかりだと思っただけだなあ＞

＜カナエ様どうするんですか？＞

セラフィム、ファヌエル、バエルに順に言われ、悩む

「練習しかないんじゃない？
最ものである。」

「ねえ、所でさ、この焼け野原何とかなる？
く大丈夫だ。すぐ直そう＞

誤算（後書き）

短い？

新たな生活

焼け野原を直してもらった後、寮に入寮する。

アイリス ラエビガータは全寮制だ。住む場所も頼る相手もない私にとっては大変助かる。

というか、例によって例の如く、実に都合の良い話だ。

寮は、流石に王立の学び舎だけあって受け入れる生徒数も多いから非常に大きな建物だった。

寮の入り口には恐らく同じ新入生だろうソワソワした様子の子達（同じ年くらいの子に使う言葉ではないが・・・）が寮監による部屋の振り分けを待っている。ちなみに、入学時に荷物は全て預かってもらい、既に部屋に魔法によって飛ばされているらしく皆手ぶらだ。この辺、流石ファンタジー。超便利

＜カナエほどの魔力保持者はいないな。勿論、既に精霊と契約しているものも。＞

「（サタン、可愛い姿ね）」

＜フェニックスが小鳥の姿でカナエの傍にいられるなら我とて化ける＞

小さな掌サイズの白い蛇の姿に化けたサタンはよろっと肩に乗っている。

私が爬虫類嫌いだったらどうするんだか。

普通の女の子だったら一気に嫌いになると思うけど。

＜我がそなたの嫌悪するものになる訳が無かろう。＞

左様ですか・・・例によって例の如く、思考が駄々漏れなんっすね

「入寮待ちの新生！これより部屋の振り分けを行う！！！」
大きく張り上げた声が聞こえた。

寮監の声なのか、若い男の声だ。

待っていた新生の列が少しずつ動き出したので私も歩を進める

「・・・・・・・・カナエカンヌキだな？4階のBー77だ」

「有難うございます。」

「・・・・・・・・ちなみにその小鳥と白蛇は？」

「・・・・・・・・ペットです」

突っ込まないでほしい。

建物は5階建て。

1階にはホールと寮監室、食堂、浴場、購買

2階は4、5年生

3階は2、3年生

4階は1年生

5階は教諭室

という位に振り分けられているらしい。部屋は一人から二人部屋。
生徒の実力や生徒の家柄によって部屋が変わるらしい。権力という
のはどの世界でも健在らしい。

ちなみに4階Bというのは4階の、B棟という。

AからDまである。

Aは剣術科

Bは魔法科

Cは商業科

Dは文学科

という位にクラスわけがそのまま寮の棟わけになっているのである

「さて、二人部屋かぁ・・・バレたらどうしよう」
部屋に入って唸る。

<流石に何時までも黙ってるわけにはいかないものねー>
<操術するのは？>

「同級生をなんで操るの・・・」
あきれた声が漏れた時、扉が開く音が部屋に響いた

「あー、カナエ㇏カンヌキ？」

「そうですね、貴方が同室？」

「一応。ルーファ㇏クライス。まさか異性と同室とはなぁ・・・」
そう、同室者は男の子だった。え？有りなの？

「悪いな・・・書類ミスだ」

寮監はすまなそうに言う

「じゃあ部屋替えをしてください」

「さらに申し訳ないことに、無理だ」

「はい？」

「今年の魔法科は女子は皆、貴族とか有名な精霊使いの子女でな、
全員一人部屋で、部屋に空きは無い。珍しいことでなぁ・・・」

「じゃあ俺をどこか二人部屋に入れて三人部屋作るとか。」

「無理だな。」

即答されてどうしたら、とルーファと顔を見合わせた

結局、部屋には鍵が掛かるということで、あれ以上粘っても仕方なく、とりあえず部屋に戻った

「改めて、ルーファだ。なんかゴメン」

「カナエです。謝る事じゃないよ。悪いのは学園側だし。」

「どうしようもないから、これから同室で生活する事になるけど」

「仕方ないよねー。改めてよろしく」

「もっと嫌がられると思ったのに・・・結構アッサリしてるな」

「不測の事態には結構なれちゃったからね」

この世界に突然飛ばされたことを考えれば異性と同室なんて小さなものだ

＜全然小さなことじゃないぞカナエ様＞

バエルが呆れた声を漏らす

途端、ルーファが驚いて目を丸くした

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・なんっつー強

大な精霊連れてるんだカナエは」

バエルがしっかり気配を出したらしい。隠しているのは無駄だと思
ったからなのか

＜勿論、生活を共にするのに、隠し続けるのは無理だけど、牽制も
込めてね＞

その台詞に他のメンバーも顕現したらしい。

私にしてみればずっと同じ状態だから今一よくわからないけれど、
ルーファの目の見開き具合で顕現したことがわかった

「カナエって何者？」

しっかり牽制した後、ようやく一息つくことになって、この世界に
もあったコーヒーを飲む

「何者って言われても人とか言いようが無いわ。」

「・・・・言い方が悪かった。こんな強力な精霊と契約しているの
に、なんで王立で学ぶ必要が在るんだ」

「私は世間知らずだからねえ。学ぶ必要性大なのよ。」
「諸事情があるのか。まあいいけどさあ」

初対面ということで根掘り葉掘り聞かない良識を持つ同室者でよかった。

今日から共に新しい生活を送るのだから、気持ちよく暮らしていきたいものだ

新たな生活（後書き）

ルーファークライス（20）

身分は一般人。魔力は上の中。ちなみに香苗は最上。
銀髪で結構美形。良い人。常識人

学ぶ

魔法、というものは思っていたよりも興味深いものだった。
というかなり面白い。

人にとって魔力とは増減はあるものの誰しもが有するものであるらしい。

魔法は魔力を利用し、更に呪文や陣によって形作る。このあたり王道だ。ファンタジー小説にありがちだがそれゆえに理解しやすくもあった。

ただし、魔法を行使するには幾つかの段階を踏まねばならないとのこと。

1に認識

2に呪文

3に利用である。

2と3はなんとなく理解できる。では認識とは何か。
これが魔法を使えるかどうか二分する重要事項らしい

「要するに、自分の中の魔力を理解するって事だな」

＜例えば、魔力の量だったり、自身の使える魔力の系統だったりだな。＞

＜主の場合は魔力量は無限で魔力の系統も全部だよ＞

「無限に全部って・・・」

系統というのは、簡単に日本風に言ってしまうえば五行のようなもので、これが重要らしい。

例えばルーファは火系統。金（金属）の系統にはもっぱら強いけど、水系統にはかなり弱い。

同じように

水は火に強いけど土に弱く

土は水に強いけど木に弱い

金は木には強いが火に弱い

これら五行から派生して雷だ、風だ、嵐だ、闇だ、光だetc…とあるわけで、それぞれ、やはり強いもの、弱いものがある。これらは主に戦闘において重要になり、ひいては精霊との契約に重要となるのだ

私が契約した精霊たちを見ても私の異常性が垣間見れる。悲しいことだが、彼らいわく地球のカミサマの気遣いらしい

例えばセラフィムやファヌエルは光属性でセラフィムに至っては水系統でもある。

フェニックスは勿論炎でバエルやサタンは闇だ。

セラフィムとフェニックスと一緒に契約するなんてまず不可能だし、ファヌエルとバエルやサタンを同時契約も不可能。

まあ私の異常性が知れるところだろう。いわゆるチートというやつだ。助かるけど。

「理解しないと、操れない、ゆえに魔法が使えない、というわけだ。」

「なるほど。だから一番重要なのねー」

「次に呪文だが、これは神々に対して断りの言葉だ」
「断り？」

「今から貴方の力を具現し、利用します、といったものだな。

基本的に精霊使いは余りこれを利用しない。なぜなら、精霊と契約できるだけで既に強力な力を有していると考えられるからだ。精霊は自身の属性を自在に操る。ゆえに精霊と契約しているものが精霊以外に力を持つ必要が無いのだ。精霊と契約できるほどの魔力の持ち主なら、焼け野原になっても仕方ないな」

「へー。でも興味あるなあ」

「なら、出したい力をよく想像することだ」

「想像？」

「力の強さを調整しろということだな。蠟燭に火を点けたいのに炎をイメージしてどうする。

ごくごく弱い火を想像しなきゃだめだろ。

水もそうだ。コップに水が一杯欲しいだけなのに海をイメージしてどうする」

「なるほど分かりやすい。・・・ルーフアこそ学びに来る必要性無くない？」

「餓鬼の頃から習ってりゃ誰でもわかるさ」

＜ルーフアの家族は魔法士なのね＞

「魔法士？」

「端的に言えば魔法使いだ。」

＜魔法士なのに庶民的なやつだな＞

「親が変わり者でね。俺も変わり者だと自負してるけど」

＜主と同室が貴様でよかったかもな。下手に欲のある人間だったら操縦していたが＞

「・・・流石闇の72柱のトップだよな、言ってることめっちゃ怖いわ」

＜俺たちに限らず精霊というのはどこいつもこいつも主至上主義者だからな＞

「それでもやっぱりあんたたちは怖いよ。」

＜でなくば、最高峰と呼ぶまい？＞

「確かにな」

私をおいて話続ける彼らの会話が結構恐ろしい・・・
でもまあ、ルーファが同室で良かったのは同意見だけど

羨む

学園での生活は、まあ結構充実している。

魔法の勉強も魔法使いに必要な付随する知識もルーファやサタン達にサポートしてもらってたが、なんとか日々着実に脳に詰め込んでいるし。

大学受験が嫌で専門に入ったのに結局勉強しているなんて・・・と最初思いはしたが。

友人は残念ながら未だにルーファ以外できないでいる。

寮に入る時にも聞いた話だが、今回の同期は女の子は特に両親に力のある人ばかりで、結構彼女達自身中々な性格だった。

うーん。よく言えば意見をきっちり言う。

悪く言えば自己主張が激しい。

お友達になるには遠慮したいタイプだ。人によるとは思うけど、友達作りは打算無しが良い。

授業中は勉強に打ち込まざるをえないし、まあ良いのだけれど。

ちなみに男子は論外だ。精霊達が非常に良い顔をしないからだ。

ルーファいわく、精霊というのは大なり小なり独占欲が強いらしい。まあいいけれど。

学園生活を送ってみて最近目に付くものがある。

「ねえ、小動物がやたらと目に付くんだけど、訓練の間も一緒にいていいの？」

私の視線を追ってルーフアが窓の外、上級生の訓練の様子を見て納得したように頷いた

「あれは小動物じゃなくて下級精霊だよ」

「精霊なの？サタン達みたいに姿を変えているの？」

「違うよ。前に言っただろ？精霊にも強い弱いのあるってさ。」

「何時かに聞いたわね」

「つまりさ、」

ルーフアいわく、精霊にはいくつかレベルに段階があるらしい。

最上級にはサタン達。人型が取れ、且つ各々の扱える力も強大。ランクはSSS

次に聖獣と呼ばれる存在。一角獣、麒麟、龍といった神話とかに登場するような精霊。実在するらしい。ランクはAAA

中間に人型が取れる精霊。サタン達より遥かに力は劣るが一般的にこのランクの精霊が操れば出世街道まっしぐら！らしい。ランクはA

次に動物の姿の精霊。この時点で最低限の意思疎通しか出来ないらしい

大型動物（猛獣）の姿の精霊。獅子とか虎とか・・・ランクはB

中型動物・・・イルカとか狼とかの姿の精霊。ランクはC

ここから一般的な精霊になる。

小形動物・・・猫とかウサギ、鳥（猛禽以外）。生活に困らないレベルの力を持つ。ランクはD

無形精霊・・・形無き精霊で扱える力も極小。ランクは最低のE

「精霊って色々あるのね」

「この国では常識でもカナエには未知だったのをすっかり忘れてた。悪いな。もっと早く教えればよかった」

「あら、とんでもないわ

ルーファにはとっても助けられているもの。いつも有難うね」

お礼を言ってふと思う。

大型とは言わないから動物の姿の精霊が欲しい、
＜カナエ様は僕達以外の精霊が欲しいの？＞

「エル・・・心を読まないでよ」

＜ごめんね＞

ファヌエル・・・通称エルが頬を膨らませる

「だって動物好きなんだから。」

サタン達が姿を変えたのも可愛いと思うけど、ホントの動物ってのが良いわー」

「精霊だけだな」

「それは言わない約束」

「だったら次の授業、楽しみにしていればいいよ。次は召還術の実践だから。」

「ほんとに？楽しみだわ」

「余り言ってやるなよ？サタン達が拗ねるぞ」

既に遅し・・・らしい

だが次の授業が楽しみだ

召還術実践！！

精霊についてのこの国の常識を聞いた翌日、心待ちにしていた実践授業が始まる

場所は外。実力者の子女子息ばかりなので何が召還されるかわからないから外らしい。

ちなみに昨日のことでサタン達のご機嫌伺いには苦勞した。みんな拗ねてベタベタ引っ付くんだもの

本日の教員は若くて実力もあるクラウドス先生。29歳だが宮廷で魔法士の仕事もしていたエリートだ

彼は家柄よりも実力ややる気を重視するので皆平等に扱うから好感が持てる。教員の中にはあからさまに鼻屑する人だっているのだ。めんどくさい

「では、今までの復習に本日は召還術を実践して貰う。

まずどんな動物を召還したいか思い浮かべろ

次に陣を地面に書け

最後に詠唱をする。

分からないことはないな？では始めろ」

気持ち良いくらいさっぱりした教員だ。彼は実力があるのでサタン達は完全に隠れている。呼ばないと出てこない

クラスメート達はみんな各々散らばって早速陣を書いていたりする。ルーファ曰く大体の人間が既に経験済みらしい。私もしないと遅れる・・・

動物・・・犬とか？こんなザックリした想像でいいのか？

陣は覚えた。スラスラと書く。ちなみに木の棒。貴族じゃあるまいしステッキとか持ってないっての

「可愛い子が良いなあ」

力が強すぎるので長ったらしい詠唱だと何が出るか分からないから、希望をボソツと言う

それでもOKなのだから我ながら末恐ろしい・・・

「お、陣が光った」

PRGみたいに陣が眩く光る。他の子達と同時期らしく目がくらむ様な光に包まれた

「カナエ、召還できたか・・・って凄いな。流石」

「狼かなあ？ものすごく可愛い」

陣が光って現れたのは大型犬より大きな狼で真っ黒の身体に毛並みは最高・・・

おまけに尻尾を振って顔を擦り付けてくる。超可愛い！！

「かわいいなあ・・・私は門　香苗。貴方はフィンというのね。宜しく」

「契約までしたなんて流石だなあ。」

「あーそういえば名前を言って名前が分かって呼べば契約なんだっけ？忘れてた・・・」

ルーファの肩の子が召還した精霊？」

「ああ。こいつは俺の契約してた精霊。名前はカイン。見ての通り大鷲だ」

「可愛いわねー」

頬が緩むのが分かるが可愛い動物を見て癒されるので自重しない。

「カンヌキもクライスも召還成功だな。2人ともランクC。素晴らしい。クライスは契約精霊だがカンヌキはこの場で契約を交わしたのでカンヌキは査定ポイントを他の人間よりプラスしておこう。ランクCというのも評価ポイントだな」

クラウド教員が満足げに手にしている名簿になにやら書き込んでいく。

ちなみに他のクラスメートはみんなランクE〜Dで私とルーファが最高らしい。意外すぎる。

この授業から契約した精霊と一緒に授業を受けてよくなった。可愛い可愛いカインに一杯癒されよう
・・・サタン達の嫉妬が怖いが。

召還術実践!! (後書き)

新しい登場人物

クラウドス(29) 実力高い魔法士。平等な教員

フィン・・・ランクはC+。一般的なCよりどちらかといえばBに近い毛並みは漆黒で体も大きい

カイン・・・ルーファの契約精霊。体長二メートル近い大鷲。

ご機嫌斜め

ご機嫌斜めだ。

誰が？想像つくと思うけど、サタン筆頭の精霊達が、だ。

<主は私達がお嫌いですか>

縋り付く様な目で見つめてくるフェニックスにそんなわけ無いじゃない。と頭を撫でる

勿論姿は小鳥だ。人型にしても本性にしても巨大なので最近の基本小鳥姿で右肩にいるのがフェニックスの定位置になっている

ちなみに現在自室のソファの上に座っているのだが、右肩にフェニックス、左肩にはサタン、右隣にはバエル、左隣にはファヌエル、後ろから抱き着いてきているのがセラフイム。

最近こういうべったりするのが多い・・・いや、私も嫉妬させちゃってるから強く言えないけど、ウチの子達は本当に嫉妬深い。

ちなみに先ごろ契約したランクCのフィンは離れたところで待ての状態で、その目は切なそうだ。
うん撫で繰り返したい・・・

「サタン達もそこまでにしとけよー。カナエが本当に嫌いになるわけ無いじゃないか」

<あら、そんなこと、当然よ>

<僕達だって、カナエ様が僕達を嫌いになることなんて無い！って思ってるもの。>

<心象の問題なんですよ。>

「さいですか・・・でもよ、今回フィンをカナエが契約できてよかったぜ？」

断言するルーファに首を傾げる

「当の本人が今一理解してないみたいだけど、これから実践の授業も入ってくる。だがサタン達を使役なんてできっこないじゃん。

もしカナエがサタン達最高位の精霊を使役できると知られ、広まれば、学校なんてすっ飛ばしてほぼ強制的に王宮に取り立てられる。王宮に束縛されて、自由を奪われるぞ。

だが教師の前で、Cランクのフィンを召還した。これから学園での訓練や勉強はフィンがこなす

カナエは普通よりちょっと優秀な女の子って印象しか残らないから

な」

「束縛はいやあね」

＜我らとて、何が最善たるかを考える頭くらい持ち合わせるが、心は違うというものだ。

我らは我らのみを見ていただきたいと何時だっておもっているからな。＞

＜まあ本当は私達を使役してもらいたいけれど、ちょうど良い番犬が出来たとでも思っておくわ＞

本当に渋々といった様子で納得してみせる精霊達に苦笑するしかないじゃない？

みんなの頭を撫でて、めい一杯甘やかして、フィンも呼んで、撫で回して、

漸く一息ついたのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1382r/>

世界に愛された娘

2011年5月16日13時14分発行